樵と夏の終わり

ダイチ

困窮と退屈のはざまに

気高き朝を見つけたならば

それはもう、入り口である

その朝を慎重に迎え入れ

ささやかな疲れを知るならば

それはもう、幸せである

ひび割れた手をかばい

樵は斧を打ちつける

頼りなく熱された昼下がり

落ち着きすぎた深緑をちびた刃が掘り起こす

同じようにひび割れた樹皮から

老いた夏がはじけて散った

樵はきゅっと口をむすび

初秋の黄昏に背を向ける

畦道を帰る少年を見て

木々の寂しさがよけいに香った

涙を流すまでもなく

それが樵の営みだった